

平成 18 年度有機 JAS 格付数量報告

平成 19 年 12 月 22 日
JONA 事務局

農林水産省 H19 年 11 月末日発表の文書より、JONA 事務局が平成 15 年度以降平成 18 年度までの各年度比較ができるように作表しました。又 これらの統計資料に関する見解を付しました。

1. 平成 18 年度の国産農産物総生産量は前年度より 4.2%減、有機農産物は 0.8%の微増であった。このため有機の割合は全体の 0.17%と前年より増加した。(表 1)
2. 有機農産物の格付数量(表 2)

国産有機農産物

- ・ 野菜・大豆・こんにゃくその他などが増加しているが、果実・米・麦・茶の減少が大きかった。合計では微増。

海外での有機 JAS 格付農産物

- ・ 野菜として分類された項目では、17 年、18 年共に大きく増加している。冷凍農産物(野菜や里芋など)の原料としての格付と飲料原料用の大麦若葉などの農産物がこの項目に含まれている。
生鮮野菜として輸入される有機農産物の数量は不明であるが、原料用の数量に比べて少ないと思われる。
- ・ 果実は H17 年度の 2 倍近く増加している。海外で JAS 認定された果実が生鮮果実として輸入されるものと、現地で日本向けに有機食品として加工されるもの(濃縮果汁、ドライフルーツなど)とに区分されるが、輸入統計上、慣行・有機の区別がないため、日本国内での流通量は分からない。
- ・ 大豆は、平成 17 年度は 35,362 トンと前年の半分になり、この報告数量を疑問視していたが、本年 H18 年度は 63,647 トンと報告されている。国内で大豆を使用した加工食品の格付報告数量から憶測すると、17 年度が疑問で、18 年度報告は妥当と思われる。
- ・ さとうきび、パームフルーツの有機 JAS 格付数量が他の品目と比べて格段に多く、また年度別に大幅に変動している。これらは現地で砂糖、食用油に加工されてから日本に輸入されるものなので、この格付数量そのものは日本の市場を評価する際の判断基準にはならないと考えている。

海外の有機農産物格付数量は、上記の通り不確定な要素を多く含んでいるため、単純に国産対海外の比率計算を見るだけでは正しい判断を導くことができないと考えている。

3. 表 3 は、日本国内及び海外の有機加工食品の格付数量(単位:トン)

国産の有機加工食品は 187,456 トンで前年の 25%増と大きく増加した。

- ・ 新たな分類で、コーヒー飲料が報告されるようになった。この 10,272 トンは飲料の中で豆乳の 21,971 トンに次いで大きい。
- ・ 有機納豆が前年の 9908 トンから、36,919 トンと桁違いに大きな数量が報告されている。平成 19 年 1 月 7 日の朝日 TV の影響での一時的にどの納豆メーカーも大童の操業だったが、その後の謝罪で沈静化した。その後の影響がどうであったか分析できていないが、報告の通りの成績が達成可能だったとは思えない。しかし納豆が良い食品であることの認識がひろまったと思われるので、今後有機納豆がどのように着実に伸びていくのが楽しみだが、有機大豆の数量確保がだんだん難しくなっている

国産有機大豆の増産が望まれる。

- ・ 有機牛乳が 134 トンと報告された。米国では認証牛乳が大きく増加しているここ 2～3 年の真っ最中の 07 年、大規模な認証違反が発覚したと報じられたが、有機牛乳は期待の商品なので日本では健やかに育てて貰いたいものである。

海外で格付けされた有機 JAS 加工食品は、その全てが輸入されるとは限らないこと、また日本に入ってから再度加工されて初めて消費者向けの有機食品として市場に売り出される商品があるので、この 69,776 トンの日本市場での流通量の評価は極めて難しいと考えている。

- ・ 急激に増えたり、減じたりしている品目がある。H16 年の糖蜜 31,660 トン、H17 年の野菜飲料の 158,871 トン、H18 年度の果実飲料 7520 トン、18 年のナッツ類 8792 トンなど。

海外の有機加工食品の格付報告は、農産物の報告と同じく、品目によっては不規則な数量報告となっているため、これら品目の詳細な調査抜きに、海外の格付け総数量報告だけで日本の市場を判断することは出来ないと考えている。